

法華コモンズ通信

法華コモンズ仏教学林事務局

192-0051 東京都八王子市元本郷町 1-1-9 善龍寺内 FAX 番号 ⇒ 042-627-7227
ブログ <https://hokke-commons.jp> /メールアドレス hokkecommons@gmail.com

巻頭言

御挨拶

立正大学教授・法華コモンズ教学委員

みわ せほう
三輪 是法

さて、何を書いていいものやら、と考えているところですが、とりあえず初めての巻頭言ということで、ご挨拶させていただきます。

名前は三輪是法と申します。現在、立正大学仏教学部で教鞭を取っております。昨年御遷化された小松邦彰先生の御紹介で、一九九六年に身延山大学に奉職し、曲がりなりにも教育者としての第一歩を踏み出しました。身延山大学には二二年間お世話になりまして、その間、十分な研究業績を上げることがもなく、時間を無駄に過ごしてしまった感があります。

身延山大学は日本で最も小さな大学で、事務職なども一通り経験させていただきました。当時、最も若かったこともあり、単年度に複数の事務職を兼ねたこともあり。担当した授業も多く、専門科目では日蓮教学の基礎から応用、法華経概論、天台学概論、観心本尊抄講義まで、教養科目では倫理学、フランス語も担当しました。教員が少なかったこともあり、いい経験にはなりました（ただ、文部科学省的には大いに問題はあると思いますが）。

現在も進行中ですが、ラオス仏像修復プロジェクトの立ち上げにも関係させていただきました。その頃の話は、雑誌『福神』のコラムなどで書かせていただいております。

二〇一九年、立正大学に教育研究の場を移しまして、現在五年目を迎えました。この間、二二年間の無為徒食を埋めるために、六〇の手習いではないですが、少しずつ研究を前に進めています。

法華コモンズの教学委員であります寺尾英智先生が、昨年度から立正大学学長に就任されました。関係上、事務局からお声がかかり、サポートする意味で教学委員を拝命することになりました。専門は日蓮教学・日本仏教思想とさせていただきますが、ただ、自分が書いている論文をあらためて読んでみますと——鳴かず飛ばずの研究ばかりですが——仏教学ではなく、宗教学であると認識しております。

ところで、事務局からお誘いをいただいたのには、もう一つ理由があると思います。それは、長いこと福神研究所（以下、福神研と省略）のメンバーとして活動してきたことです。ここ数年は上杉清文所長、澁澤光紀さん、作田光照さんなど所員の皆さまと交流することがなかなかできなくなっていました。東日本大震災前は勉強会や雑誌『福神』の編集会議、取材などに参加させていただき、さらにそのあとに催される飲み会にも必ず参加させていただいておりました。



「中観思想とは何か

——その成立と展開——

講師 齋藤 明 先生

報告 佐古 弘純

六月三日(土)、齋藤明先生による「中観思想とは何か―その成立と展開」と題する講義が一日集中講座として開催された。オンライン聴講もできるハイブリッド型の講義として執り行われ、大勢の人が参加した。

周知のように、齋藤先生は国際仏教学大学院大学教授、東京大学名誉教授として現在ご活躍であり、多くの著書や論文等の執筆、数々の受賞歴、さらには様々な仏教学会の理事を歴任され、まさに「現代の仏教研究者の頂点」といっても過言ではない学者である。

本講座の目的は、講義概要に「仏教思想史における中観思想とはなにか、またそれはいかなる背景のもとにどのような展開を見ることになったのかを再考してみたい」とある通り、最新の研究成果を踏まえ、中観思想の起源からの全展開を考察することにある。齋藤先生のご見解を直接聞くことができた本講座は、研究者のみならず、中観思想史を初歩から学ぶ者にとって大変貴重な講義となった。

先生は、前半の講義で中観思想史の流れを詳しく

福神研の取材では、仏教学や宗教学の研究に取り組んでいらっしゃる先生方はもとより、さまざまな先生、文壇などでご活躍の方々のお話を聞くことができました。こうした人脈は上杉所長のものですが、具体的には、袴谷憲昭先生、武田道生先生、鎌田東二先生、島田裕巳先生、植島啓司先生、武田崇元先生、山折哲雄先生、栗本慎一郎先生、呉智英先生、吉田司先生、福田和也先生、松戸行雄先生、四方田犬彦先生(四方田先生は飲み会だけだったかもしれない)、新橋あたりで)、故・松山俊太郎先生、故・丸山照雄先生など―法華コモンズで教えていらっしゃるらない先生をあげましたが、西山茂先生や末木文美士先生、菅野博史先生、大谷栄一先生などには福神研でもお世話になりました―など、とりわけ一九八〇年代の現代思想の流行で御著書を拝読している先生方との交流は刺激的でした。福神研のメンバーで新宿紀伊國屋書店のホールで開催されたシンポジウムに参加した際には、浅田彰氏や柄谷行人氏などの話を聞くこともできました(その後、確か飲みに行ったような記憶があります)。



三輪 是法 先生

今現在、このように研究職に従事し続けているその根幹を辿れば、浅田彰氏の『構造と力』に行き着きます。学問の世界に足を踏み入れるなどは夢にも思っておりませんでした。この本を読んだおかげで、物事について考えられるという楽しさを知りました。何を書いているのか全くわからない本書を理解したい、という気持ちから専門書の購読が始まり、やがてサルトル研究者であったフランス語の教員・桑田禮彰先生と出会って、ミッシェル・フーコー『Histoire de la sexualité』の読書会に至り、栗本慎一郎先生の『鉄の処女』を読んで日蓮宗僧侶である上杉清文所長の存在を知ったのでした。

以上のように、決して正当ではない研究人生を歩んでまいりましたが、その中でも約三〇年近くに及ぶ福神研の活動から多くの刺激を受けたことは間違いありません。オウム真理教事件が世間を騒がした時代、雑誌『福神』は宗教雑誌としての存在意義を高めていきました。そして、常に研鑽を怠らないために定期的に開かれる勉強会への参加、本学林の前身である「本化ネットワーク研究会」にも参加させていただきました。

法華コモンズ学林となって参加することはほとんどありませんでしたが、これをきっかけに、わずかでもお役に立てればと思っております。コード化・超コード化・脱コード化とドゥルーズIIガタリは言いましたが、脱コード化から非コード化へ、本学林が法華仏教の世界を実現することを期待しつつ、巻頭の御挨拶に代えさせていただきます。 合掌

「鎌倉仏教研究史について」

—官僧・遁世僧の立場から—

講師 松尾 剛次 先生

報告 武川 清明

七月一日(土)、松尾剛次先生の集中講座「鎌倉
仏教研究史について 官僧・遁世僧論の立場から」
が行われました。

最初に鎌倉仏教における通説である「鎌倉新仏教
論」と「顕密体制論」の概要と問題について説明い
ただきました。

家永三郎の研究から挙げられる「鎌倉新仏教論」
の問題点として「鎌倉の新仏教」を3種類に分類、
新仏教の指標として反戒律・反祈祷・民衆救済を用
いたものの、それは親鸞を新仏教のヒーローとする
ための自分勝手な価値判断であること、黒田俊雄に
よって提起された「顕密体制論」については鎌倉新
仏教の判断基準である正統と異端について教学上・
世俗権力という2つの要素を混同していること、そ
の宗教の革新性を世俗権力から異端とされるか否か
によって判断するのは問題があること、顕密体制を
結びつけている密教化が進み結束が強まるはずなの
に戦国大名の力で崩壊したというのは論理矛盾であ
るとしました。



齋藤 明 先生

解説された。非有非無の中道説を中心に、初期般若
經典にみる空・無自性の意味を確認し、ナーガール
ジュナの名著である『中論』を取り上げ、五世紀初
頭まで『中論』と初期註釈文献の思想を初期中観思
想、デイグナーガの影響を受けてナーガールジュナ
の空の思想を推論式に論証する方法を確立し、「中観
派」を創始したバーヴィヴェーカ(自立論証派Ⅱス
ヴァータントリカ)と、それを批判したチャンドラ
キールティ(帰謬論証派Ⅱプラーサンギカ)の思想
を中期中観思想、八世紀後半にシャーンタラクシタ
とカマラシーラが瑜伽行中観派(瑜伽行の教説を中
観派に取り入れる)を確立した時代を後期中観思想
として説明された。さらに、チベット仏教の形成と
して仏教前伝期(吐蕃王朝分裂まで、特にサムイェ
ーの論争)を解説され、前半の講義だけでもかなり
広範囲の内容となった。

後半の講義は、ナーガールジュナの足跡と複数の
顔を解説した後、ナーガールジュナの思想(二諦説、
空の三義)を取り上げた。先生は、「縁起するものは

他に依存して生じるから自性を欠き、すべての事物
が固有の本質をもつことなく縁起する、という相互
縁起こそが空であり、空は縁起にほかならない」と
規定したその思想を説明して、「空であるから人や事
物の変化・発展もありうるとするのがナーガールジ
ユナの立場である」と明かされた。

さらに、「アサンガとヴァスバンドウによって大成
した瑜伽行派は、三性説(遍計所執性・依他起性・
円成実性)を学派の中心的な実践理論として定着さ
せ、空を限定された意味あいでも用いながら、空の主
体化、内面化を図った。主観と客観の二つの要素を
欠くことが瑜伽行派における空の理解である」と解
説された。また、ナーガールジュナ以降の思想系譜
として、「瑜伽行派では、主客二元の対立をはなれた
空は、本性的に清浄な心であると理解して、それが
偶然的・外来的な煩惱に汚されている、としたのが
如来蔵・仏性思想に連なる流れである」と瑜伽行派
の唯識と如来蔵・仏性思想それぞれの空の理解につ
いて教示され、講義終了となった。

四時間以上におよぶ講義であったが、まったく長
時間と感じさせない内容であり、瞬く間に時が過ぎ
てしまっていた。先生は、高度な知識を聴講者に合
わせて分かりやすく話して下さり、聴講者からの質
疑応答にも丁寧な答えて下さった。講義終了後、そ
の充実した内容に満足した聴講者から大きな拍手が
送られた。法華コモンズ講座に登壇していただき、
心より感謝を申し上げます。

そこで祖師のみならず弟子たちも視野に入れた制度、僧侶集団がいかなる人々を救済しようとしたのか、得度・授戒制と立場・救済活動の相違に注目して、国家的授戒制下において国家のために祈禱する官僧と、官僧を離脱して個人の救済を目指す遁世僧という切り口を提示して頂きました。

官僧は鎮護国家の祈禱に従事するため穢れ忌避（白衣）の義務があり葬式に従事しないこと、穢れについてはその中心が人間の死穢と産穢、家畜の死穢と産穢、失火の穢れであり、穢れ忌避の例として『今昔物語集』によれば官僧が「自分などが死んだら大路に捨てられてしまう」といったことを挙げていただきました。

遁世僧（鎌倉新仏教の担い手）は官僧を離脱して仏道修行に励み（遁世）、穢れ忌避の義務がなく葬式などにも従事して個人救済の活動を目指す、法然教団、親鸞教団、道元教団、明恵教団、俊芿教団、叡尊教団、恵鎮教団、日蓮教団、一遍教団らも遁世僧教団であったとしました。また基本的に黒衣（黒袈裟、墨染め袈裟）を着たことを特徴としました。



松尾 剛次 先生

持戒と破戒の関係性について、女犯が禁じられたなかで僧侶が稚児と性交することが一般化して、元亨元（1321）年に醍醐寺本で書写された模本『稚児草子』では性交の様子が露骨に表現されており、当時は当たり前の習俗としてあったことが想像できます。また、天台宗では稚児を観音としての聖性を付与する儀礼としての稚児灌頂が行われ、その後初めて稚児を犯すことが成された、と解説していただきました。

講義報告

法華仏教講座

【令和四年度 後期】

第四回 菅原関道先生 第五回 花野充道先生

【令和五年度 前期】

第一回 大松久規先生 第二回 大平寛龍先生

第三回 魚住孝至先生

報告 担当スタッフ

本講座は法華コモンズの前身・本化ネットワーク研究会での講義形式を踏襲し、およそ月一回のペース、毎回二時間の枠で開催されている。講師は、斯界で注目されている学者・研究者を毎回交代制でお迎えしている。ここでは、令和四年度後期第四回・第五回と令和五年度前期第一回〜第三回の講義について報告したい。

各回ともに、常圓寺様祖師堂地階ホールを会場とし、Zoom実況配信を同時に行うハイブリッド型

の対面式で講義が執り行われた。また、いずれの回も、土曜日午後四時三〇分〜の開催で、仏教思想研究・日蓮教学研究の第一線で活躍する研究者をはじめ多くの聴講者が集い、時間を三〇分前後延長しての活発な質疑応答が行われた。なお、講義は全回、受講者にビデオ配信されている。

《令和四年度 後期「法華仏教講座」》

【第四回 菅原関道 先生】

法華仏教講座第四講、菅原関道先生（興風談所・所員）の講座『観心本尊抄』から『曾谷入道殿許御書』へが令和五年（以下同）一月二八日、に執り行われた。

文永一〇年（一二七三）四月二五日の『観心本尊抄』から、文永一二年三月一〇日の『曾谷入道殿許御書』に至るまでの、日蓮聖人の思想をめぐる法義的展開について検討された。

はじめに、清水龍山氏の仏界縁起説と、これに関する浅井円道氏の解説を取り上げられた。続けて『観心本尊抄』の「自然讓与段」について、菅原先生は



菅原 関道 先生

「日蓮聖人の確信」によって述べられた言葉である、と説明された。この「確信」という言葉は、これまでの『観心本尊抄』解釈では聞かれない言葉である。その後「四十五字法体段」と「其本尊為体段」について、己心、結要付属をタームとして、両文の法義的な関わりについて力説された。そして最後に『観心本尊抄』から『曾谷入道殿許御書』に至る、上行自覚や末法下種などをめぐる日蓮聖人の思想について、さまざまな御書を引用して丁寧の説明された。

また、冬の佐渡は雷鳴がすぐ吹雪が吹き荒れている（長年佐渡に住んでいた故大黒喜道氏から聞いたとのこと）。このような環境のなかで開本両抄が書かれた、というお話は、極寒の佐渡における日蓮聖人の執筆環境がうかがわれる興味深いものであった。

おわりに、日蓮教学界の現状について、自分の立場を離れ広く世の中を見ることが必要ではないか、と述べられた。日本の最先端の研究を伝える場を広く共有しよう、という法華コモンズの理念にも通ずる重要なご提言であった。（西山明仁 記）

【第五回】花野充道 先生

三月二五日、当学林教学委員にして法華仏教研究会主宰の花野充道先生による『大乘起信論』の本覚思想』の講義が執り行われた。

花野先生は、仏教思想研究・天台本覚思想研究の第一線で活躍される立場から、昨今の「本覚思想」に関する議論の大きな混乱と誤解の跋扈に収束を図るべく、その原因を説き明かされ、『大乘起信論』『涅槃経』『法華玄義』『摩訶止観』『摩訶止観輔行伝弘決』



花野 充道 先生

『大般涅槃経疏』等を引用して、鋭く重要な論点を示され、細かに解説してくださいました。

その中で、例えば、玄奘の唯識説における阿頼耶識が妄識、『起信論』の阿梨耶識が真妄和合識であり、天台大師智顛の場合、地論師の如来蔵思想（真識縁起説）、撰論師の唯識思想（妄識縁起説）を、心生説にして「冥初は覚を生じ、覚より我心を生ず」と説くサーンキヤ学派の流出説に墮すと批判したこと―等々、興味深い重要事項が連続的に明かされた。

今回の講義で、先生は、『起信論』の本覚思想は如来蔵思想（唯心論・本覚法身）、天台教学の本覚思想は大乗空思想に立脚（実相論・本理法身）しており、両者の根本的な相違が、本有常住・遍一切処の法身に智慧を認めるかどうかにあることをご教示くださいました。そして、それらを解説されなから、日蓮教学の立場がどのように理解されるべきかを皆に問いかけられた。

なお、今回の講義の核心部については、先生の玉稿が、近時発刊された『法華仏教研究』第三五号に掲載されている。（布施義高 記）

《令和五年度 後期 「法華仏教講座」》

【第一回】大松久規 先生

四月一日、愛知学院大学専任講師の大松久規先生による「天台大師所説の禅観と止観」の講義が執り行われた。

大松先生は、天台大師智顛において、前期時代に説示された禅観から、晩年の『摩訶止観』を中心として確立された止観が、実際にどのような関係にあるか、先行研究を確認された後、『釈禅波羅蜜次第法門（次第禅門）』と『摩訶止観』の内容を具体的に対比して考証することを中心に、講義を進められた。

つぶさには、天台大師の場合、すべての仏法を「禅」「法華三昧」「六妙門」「覚位三昧」「止観」など、特定の概念によって統括しようとする姿勢が共通していること、そして、禅から止観へと転回・転向・転5化したとまではいえなく、「展開」したと見るべきであることを明らかにされた。

『摩訶止観』は、日蓮聖人が重用され、独自の受け止め方を通して題目仏教の樹立に繋がったことが



大松 久規 先生

知られる。その『摩訶止観』が、天台大師智顛自身
においてはどのような意義を有していたか、今日の
仏教学的観点からポイントを明らかにした大変有意
義な講義であった。
(布施義高 記)

【第二回 大平寛龍 先生】

五月二七日、興隆学林専門学校准教授・立命館
大学非常勤講師の大平寛龍先生による『科註妙法蓮
華経』と日蓮門下との関わりについて」の講義が開
催された。

『御義口伝』に引用される文献として日蓮門下で
つとに知られてきた、中国元代の徐行善による『科
註妙法蓮華経』（以下、『科註』）。従来、その主な関
心は、そこで引用される『科註』の成立年代（元貞
元年、一二九五）が、『御義口伝』の講述年代（弘安
元年、一二七八）より一七年も遅いという、執行海
秀氏の貴重な指摘に存した。
今回、大平先生は、そもそも『科註』が日蓮門下



大平 寛龍 先生

でいつ頃から如何に用いられ、また如何に広がって
いったかなどの重要な問題について、多角的に講じ
てくださった。

特に、慶林日隆の所持本『科註』とその教学研究
上の位置、また、近年その存在が明らかになった本
国寺日伝写本『科註』などについて、詳細な研究結
果を報告してくださった。

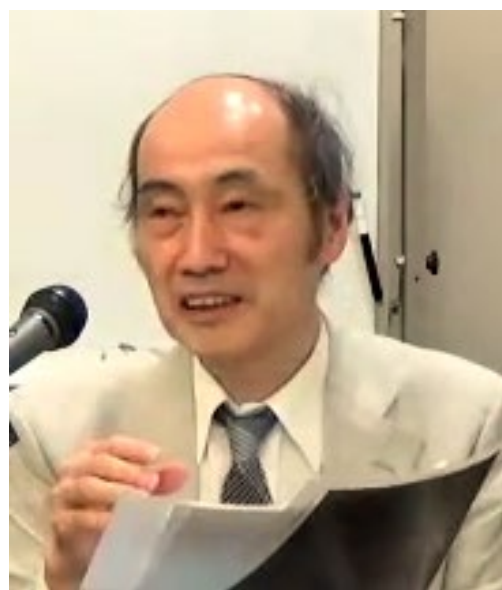
日蓮門下における『科註』との関わりについて、
日蓮教学史研究の新生面を切り拓いた画期的な御研
究に、参加者一同、大変感銘を受けた。また、プロ
ジェクターの特性を最大限に活用した、ハイテンポ
にして明快なプレゼンテーションは圧巻であった。
(布施義高 記)

【第三回 魚住孝至 先生】

六月二四日、魚住孝至先生（放送大学・特任教
授）による『法華義疏』について」の講義が執り行
われた。

魚住先生は、日本思想史・文化史の立場から法華
義疏の成立、また撰者とされる聖徳太子について、
先行研究を踏まえたうえで詳細に説明された。

講義はパワーポイントを使用して進められ、聖徳
太子の画像や東アジア全体の地図など、さまざまな
資料を紹介しながら説明を下された。特に、皇
室に所蔵されている『三教義疏』を納めていた経帙
（きょうちつ）に、三教義疏について記されている
ことから、三教つまり『法華義疏』『勝鬘經義疏』『維
摩經義疏』が、一体として成立していたことを証示



魚住 孝至 先生

された。

次に戦後の研究のなかには、『義疏』の内容に敦煌
文献と同じ内容が見られることから、『義疏』は聖徳
太子の撰述ではなく中国の撰述である、とする見方
がある。しかし、そこには多くの問題点があること
から、魚住先生は、『法華義疏』の原典の精査、思想
内容についての考察など、再考察すべき多くの課題
が残されていると指摘された。

また、聖徳太子による冠位十二階の成立、十七条
憲法の制定、仏教寺院の建立などの事蹟について、
大陸・朝鮮半島を含め広く東アジアにおける文化史
の観点から、日本が文明国の一員として認められる
ために行われたことを指摘された。

以上、魚住先生は最新の研究成果により、『法華義
疏』の成立と、聖徳太子の実像に迫るお話をお聞か
せ下された。
(西山明仁 記)

歴史から考える日本仏教⑩

法華持経者の思想的系譜

報告 作田 光照

長らくお世話になっている菊地大樹先生（東京大学史料編纂所）を講師に、「歴史から考える日本仏教⑩」（日本の偽書・偽文書を読み解く）を開催。二〇二三年度前期第一講は四月十一日「偽書・偽文書とはなにか」と題して開講。

中世は「偽書の時代」と捉え、真正文書に対して多くの偽書が生まれ、偽書を悪い物として捉えない。偽書は正統がはつきりしている時こそ異端・偽書が成立する。

二〇一七年の法華コモンズで『吾妻鏡』を講義した（『吾妻鏡と鎌倉の仏教』吉川弘文館・二〇二三年三月刊行）。同書は鎌倉幕府付の公的歴史書であるが故に、幕府にとって都合の悪い事実は無視された。

中世は権力分散化された社会で、各地・各集団での争乱が起こっていた。その裁判では客観的な証明よりも、主張の全体を「物語る」余地が残されていた。異端（偽）を判定する正統（中心）を欠いた中世社会に「偽書・偽文書」は存在しないが故に、偽書は自由に生成され流通していた……と考えると、強い権力に縛られない社会は、文学・宗教・思想にとってそう悪いものではないか。

五世紀中国の蕭子良による中国撰述經典の成立、東アジアにおける戒律思想の発展、中国での釈経録の成立により偽経が締め出される課程、日本仏教への影響などを解説。素朴な正統か異端か（真書か偽書か）という二元論から解放し、時代背景、地域文化、翻訳の観点など密接に絡み合う関係をゆっくりほどこいていく試みが必要、とした。

第二講「偽書・偽文書の生まれる伝授の場」を五月九日に開講。伊藤聡先生の「三宝院流の偽書―特に『石室』を巡って―」を参照。真言宗小野流の一流の三宝院流は、日蓮聖人が受容した密教の一つの核になる。

密教の伝授・相承は現代から見るとゴチャゴチャになっている。しかし中世の人々はそれを見極めている。真言密教の系譜は、聖宝（小野流）、益信（広沢流）の二派に別れ、聖宝は空海の弟子真雅について十六歳で出家し、元慶八年（八八四）東寺の源仁



菊地 大樹 先生

から伝法灌頂を受け、東密小野流開祖とされた。後年、三宝院・理性院・金剛王院の醍醐三流に分かれるが、客観的な証明は難しい。その正統性は法流全体で時を経た上で是認される必要があった。

三宝院流は突出して『遍口抄』『石室』『纂元面授』などの多くの説話性の高い偽書が生成されたが、三書は「須秘口決事」に影響を受け、学術的な考察が盛んであった。偽書や立川流の異端を指摘することで自己の正統性を主張するという面もある。

偽書・偽文書によって発展した流派は怪しいもので、真正な文書によって立たない宗教はいかがわしい、という発想になるのが現代人の考え方になるが、それを受容した中世と現代とは「真実としての語り」と「事実としての歴史」とのバランスが異なる。

梅雨空の六月六日、第三講「中世『神話』と偽書・偽文書」を講義開催。

中世神話とは一九七〇年代に提起され、九〇年代末から注目された。一般的な偽書・偽文書のイメージは、作者を偽って偽作したり、実際に発給されていない文書を偽作すると考えられている。

『日本書紀』には本来ではあり得ないフィクションを註釈として記し、偽書が作られていく。この註釈と偽書は密接不可分の関係にある。それが中世の終焉と共に語りが消え、江戸時代で真偽論争が始まり偽書が排除されていく。

時間観念は昔から現在に一直線に流れ、不可逆的で後戻りしない。これは近代的な考え方だが、行きつ戻りつの「螺旋的」な時間軸や、廻り循環する

円還」の時間軸も考えられる。

『日本書紀』は正史として編まれ、神話が含まれている。『古事記』は江戸時代に註釈が盛んになった。また『日本書紀』に拾い損ねた神話を集めた『古語拾遺』や、風土記などが古代日本神話として成立した。記紀神話は皇室による国土と国民の支配の正統性を主張した政治性をもって構想され、儒教・道教・仏教の影響を受け八世紀に成立した。

その中で仏教僧が密教の本地垂迹説を援用して神々を論じ、両部神道が中世神話の成立に関わっている。『神道五部書』の頃になると仏教に対抗する為、神道の優位性が意識される神本仏迹説が説かれる。

「祖師」が不在な中世神道と中世神話が正統を欠くからこそ、自由な創造と発展を生み出す固有のテキスト生産システムがあり、それを偽として排除するのではなく、正面から向き合い解釈していくことで中世思想の実態を知る手がかりとなる。

今後の予定としては、七月十一日に第四講「世俗世界に現れた偽文書」を開催。八月八日には第五講「生まれ変わる近世以降の偽書・偽文書」を開催予定。山本英二氏「近世の偽文書―武田浪人を事例に」を事前資料としている。

日本の古典や中国の訳経、密教の相承、神道と仏教などの観点から、その時代における偽書生成の違い、人々の受け止め方の違いなどを通じた視点の広い展開は毎回新鮮に感じます。ご趣向が伺えるPCステッカーが見られる画面から八月で一端 **잘가라** (さよなら)。

講義報告

菅野 博史 先生

『法華経』『法華文句』講義

報告 澁澤光紀

昨年度後期の三月講義で、ようやく「方便品」を終わり、「譬喩品」に入りました。本年度四月二四日に始まった講義は、通算五九回目です。いつも用意して頂くレジュメですが、各項目として、【科文】・【经文(漢文)】・【经文(訓読)】・【法華文句】の解釈―天台の解釈(現代語訳)の四つを立ててあり、そのレジュメを活用しての講義では、『法華経』の经文と『法華文句』での天台の解釈を照合せながら、実に綿密で詳しい解説をしていきます。講義はその後、五月二九日、六月二六日と続きましたので、その三回分をまとめて簡単に報告していきます。

まず【经文】の内容と範囲についてです。

「譬喩品」は、「方便品」において仏から三乗方便・一乗真実(三つの声聞乗・縁覚乗・菩薩乗は方便で、ただ菩薩のための一仏乗のみあり)を告げられた舍利弗が、その喜びを仏に語るところから始まります。舍利弗が、私は菩薩より劣り成仏できないと自らを責めていたが、いま世尊の言葉をお聴きして疑いと悔いは全て消えましたと述べると、仏は舍利弗に「華光如来」という仏になると授記します。喜んだ舍利弗は「どうか世尊よ、ここにいる阿羅漢たちの疑惑も晴らして頂けますか」と願い出ます。世尊はこれに対して譬喩をもって応えて、「ある国に、大長者がただ

一門あるのみの広大な家に、三〇人の自らの子供達と五〇〇人の使用人とともに住んでいた。しかし、突然に家事となり火に包まれたが、遊びに夢中になっていた長者の子供たちは危険も知らず逃げようとしめない」と述べるようになります。

続いて、【法華文句】の解釈の範囲ですが、テキスト『法華文句』(II)の六〇―一頁二行目(「所以者何」従り「每自剋責」におわるまでは、意に解無きの失を明かす)から始まり、六二―一頁の一行目(「光宅の雲日わく、「三界はむなしと雖も、九十は多しと雖も、出要を論ずるに、唯だ是れ仏教なるが故に、一門と言う」と。)までになります。次に講義内容の説明ですが、紙幅の都合で印象に残った解釈と感想を挙げるだけにします。

第一回講義の中では、「四悉檀によって文を解釈する」という一説が出てきます。「世界悉檀」「為人悉檀」「対治悉檀」「第一義悉檀」という「四悉檀」は布教法の用語なので、この四つを文の解釈に当てるといえるのは、実に闊達な用語の使い方だと思えます。

また二回目の講義では、舍利弗の授記について、舍利弗は前に印可を得ているので自分で成仏することと分かるはずだ、なぜ「授記」が必要なのか、という問答を取り上げています。天台はその理由として、授記には次の四つの意味があるだと明かしています。①二乗はまだ授記されていない。②機根が中下の者には、授記して励ます必要がある。③そばで聞いている者に縁を結ぶ。④舍利弗に本願を遂げさせる、という四つを挙げています。授記に②のような、激励の意味もあるのかと思いますが、化城喩品の「化城」も再び奮起させるための励ましですから、授記



菅野 博史 先生

は途中で挫けないための最高のエールなのでしよう。また、「衆生は未だ癒えざれば、菩薩も亦た未だ癒えず」は、「示同」といつて、舍利弗や迦葉は実は菩薩なのだが、未熟な「未だ癒えざる」者たちのために声聞という同じ姿を示しているという説明も、他者のために生きる菩薩の真骨頂を表わしています。

第三講は、譬説周の解説で始まります。三周説法とは法説周・譬説周・因縁周で、また三周それぞれに正説・領解・述成・授記の四つの説明があり、この四つが独立した章として、その後の品に重なっています。まず譬喩品が正説となつて、三車火宅の譬えが説かれます。信解品第四は領解にあたり、弟子たちが長者窮子の譬喩を述べて、自らの領解を示します。次の菓草喩品第五は、釈尊が弟子たちの理解を認めての述成にあたり、授記品第六で授記となります。また、最後に引用されている光宅寺法雲の言葉は、出典未詳ながら火宅の「一門」についてこう説明しています。「三界は広大であるけれども、九十「六種

の外道」は多いけれども、出要（苦から出離すること）を論じると、ただ仏教だけであるので、一門という。広大な屋敷になぜ一門しかないのかという不自然さの説明として、唯一の救いが仏教だけだから、としたのは中々上手い解釈だなと感心します。

以上、講義報告を終わりますが、菅野先生の『法華経』『法華文句』講義』はようやくに譬喩品に入つたところです。これから受講する方も充分に行けます。ぜひ御受講下さい。また、同日の午後三時半～五時半には、菅野先生の『摩訶止観』講義』が開催されています。詳しくは、法華コモンズ・ブログから講座パンフレットをご覧ください。

また、菅野先生に関するご報告があります。去る六月三十日（金）午後五時より、法華コモンズ仏教学林主催で「菅野博士古稀記念講演会・祝賀会」が開催されました。当日は、四十名を越える方々が参集されて、素晴らしい講演と祝賀会が催されました。その記事が、中外日報新聞に掲載されましたのでご紹介いたします。

中外日報 二〇二三年七月一九日記事

菅野博士古稀講演会 法華コモンズ

「研究一筋」回顧、論文集に意欲

日蓮聖人門下有志でつくる法華コモンズ仏教学林は六月三〇日、東京・新宿区の日蓮宗常円寺で菅野博士・古稀記念講演会を開いた。中国仏教研究と日中学术交流に尽くしてきた菅野氏は、研究一筋の半生を回顧し今後も学問を継続していくと語った。

菅野氏は一九五二年、福島県生まれ。東京大文学部インド哲学科を卒業後、同大学院博士課程を単位取得退学。東方研究会研究員等を経て、創価大学文学部教授に就任。今年三月に定年退職し名誉教授となった。「中国仏教の経典解釈と思想研究」など多くの著書がある。中国の研究者とも積極的に交流し、中外日報社・世界宗教研究所共催「日中仏教学術会議」、東洋大・中国人民大・金剛大共催「三國国際仏教学術大会」などに携わってきた。

法華コモンズ仏教学林では教学委員を務めており、創価大で最終講義が行われなかったため記念講演が企画された。西山茂・同学林理事長は「設立以来大変お世話になってきた」と感謝。布施義高・学林長は「最も難解な分野を研究されており、門流の枠を超え日蓮門下、日本仏教界の宝」と讃えた。

講演では主に経典注釈書の研究動向を解説したほか、自らの研究生活にも触れ、「大学院で天台三大部を研究しようと思っていたが、玉城康四郎教授から「若い時は広い視野を持つように」と指導され、隋代の僧・吉蔵の法華経注釈書に取り組んだ。後に天台大師智顛などを研究する際に役立った」と振り返り、「これからも研究を続けていく。八〇歳で論文集を出せば」と意欲を見せた。

木村清孝・東京大名誉教授、三友健容・立正大名誉教授、末木文美士・東京大名誉教授、斉藤明・東京大名誉教授をはじめ多くの仏教研究者が集まり、続いて開かれた祝賀会で「若いころから寸暇を惜しんで勉強していた」と思い出話が披露され、今後のさらなる研究に期待の言葉が送られた。（有吉英治）

「宗教と公共空間」

第1講 講師 櫻井義秀 先生

「統一教会問題から考える宗教の規範性と公共性」

第2講 講師 中田考 先生

「カリフ制と公共空間」

第3講 講師 上杉清文 先生

「どうする立正安国」 報告 編集部

法華コモンズ特別集中講座として、令和五年八月五日（土）午後一時半より、常円寺祖師堂地階ホールを会場に、講演とシンポジウムによる「宗教と公共空間」が、三人の講師を招いて開催されました。

この講座は、昨年の二つの大きな事件、「ウクライナ侵攻」と安倍元総理の銃殺事件により再浮上した「統一教会問題」の衝撃的を受け、共通する「政治と宗教の問題」を考え直すため企画しました。また、法華コモンズは、日蓮思想の現代化を目指している集まりであり、日蓮聖人がめざした立正安国をどうするのかという課題を抱えています。そこでタイトルを、「宗教と公共空間」として、多様性と多元性が叫ばれる現代社会での宗教的理想のあり方を論じ合うこととなりました。講師には、宗教と公共性を統一教会問題から論ずる櫻井義秀先生（宗教社会学者）、イスラーム教徒の立場から論ずる中田考先生（イスラーム法学者）、そして立正安国の問題として論ずる上杉清文先生（日蓮宗僧侶）を招き、それぞれ国内的に、世界的に、また実践的な視点からこの問題を検討して頂きました。

第一講の櫻井先生は、冒頭から日本人の宗教的規範性の不足を嘆くと共に、その歴史認識の貧困さにも言及して、文鮮明の教説（植民地支配での「恨」とその贖罪を日本人信者に求める。アダム国・韓国にエバ国・日本が奉仕する）に

あるように、統一教会問題が日韓のポストコロナな問題であることを、日本の保守もリベラルも認識できていない、と指摘します。

そして具体策として、「解散命令の請求」は政治家との癒着を断ち新規信者の入信を防ぐ効果があつて必要であり、また宗教二世問題が生じないよう「信仰と自由の関係」、そして創価学会・公明党のあり方も含めた「政治と宗教の関係」を問い直すべきだと述べ、一人一人がカルトの勧誘・教説に毅然として対応できるように、宗教リテラシーと歴史認識の必要性を強調された。

第二講の中田先生は、神の唯一性に立つイスラーム信者の視点から、現代は終末とニヒリズムの世紀であるとして、神以外の全ては偶像であり、科学主義も世俗主義も民主主義も民族主義も偶像崇拜である、とみます。そして現代世界とは、全世界が西欧文明の文化植民地化で覆われ、領域国民国家システムを前提とし、その主神は国家（リヴァイアサン）であり、陪神は金銭（マモンの神）、祭祀は科学者とのその眷属（政治・軍事家・資本家）だとします。その世界の中で、「カリフ制」とはイスラームの教えの実現の全ての要であり、カリフ制不在の現代では自称他称のイスラームは全て（自分も含めて）偽物となる、と言い切ります。そして、自分には何も無く、ただ神のみが力をもつ、と信仰的信念を述べられました。

第三講の上杉先生は、講題とした『立正安国論』が日蓮宗からも公的なものが刊行されておらず、公共空間でも認知されているとはいえないがたいとして、その説明から始めました。そして、日蓮宗が自らの理想の根拠とする『立正安国論』というテキストをどのように読むかを問題にして、テキスト論を展開。その実現にあたっては、カントの『純粹理性批判』から、構成的原理（理性に基づき、社会を具体的に変えていく理念）と、統整的原理（実現せずとも現状を批判し続けて変えていく理念）を比較検討。そして「人間の理想は統整的原理を根拠としている」というカントの言葉を引いて、「立正安国」とは永遠に生成し続ける理想として追求すべきと述べ、その実践例として「経産省前脱原発テントひろば」での日本祈禱団四十七士（JKS47）の「諫暁」活動を挙げられました。

以上の各一時間の講義をふまえて、講師同士が質疑応答する「鼎談」に入り、その後を受講者からの質問用紙を読み上げての質疑応答を行いました。それぞれの質疑では、講義では聞けなかった貴重な見解が聴けて大いに盛り上がり、予定時間を三〇分以上越えて、開始から五時間半をかけての講座を終了しました。講師の先生方、また受講の皆さまには、熱く感謝申し上げます。



「宗教と公共空間」鼎談

法華コモンズ仏教学林 後期講座一覧

2023(令和5)年度後期講座 開講:9月~2024年3月

《 対面講義が不可の場合は、開催日時でのオンライン講義、または講義動画配信にて開講します 》

- 「**仏教哲学再考②-『大乘起信論』を手掛かりに-**」 全4回 対面&実況
開講時間：第1または第2水曜日 午後6時30分~8時30分 講師：末木文美士
第1回：2023年 10月 4日 第2回：11月8日 第3回：12月6日
第4回：2024年 1月10日 【受講料】1回分5,000円
- 集中講座「**史実・尼僧畜髮縁付—ブツダ時代から現代まで—**」全2回 対面&実況
開催時間：土曜日 午後1時30分~5時30分 講師：大竹 晋
第1回 10月21日(土)「世界篇 /日本篇Ⅰ：前近代、明治、大正」
第2回 11月18日(土)「日本篇Ⅱ：昭和戦前期 /日本篇Ⅲ：昭和戦後期、平成、令和」
【受講料】1回分5,000円
- シリーズ講座「**法華仏教講座**」全6回 開講時間 午後4時30分~6時30分 対面&実況
第1回 10月28日 「佐渡始願本尊の研究(一)
—身延曾存の「佐渡始願本尊」の真偽論—」 講師：川崎 弘志
第2回 11月25日 「四明知礼の実相論とその展開」 講師：久保田正宏
第3回 12月 2日 「日蓮僧の中世天台寺院における修学
—身延山久遠寺身延文庫所蔵資料からの検討—」 講師：渡辺麻里子
第4回 1月 6日 「日蓮花押の解釈における諸問題
—花押の母字と変化の理由を探る—」 講師：村上 東俊
第5回 2月17日 「広蔵院日辰の教学思想とその基盤」 講師：神田 大輝
第6回 3月23日 「佐渡始願本尊の研究(二)
—国柱会の「佐渡始願本尊」の真偽論—」 講師：川崎 弘志
- 連続講座「『法華経』『法華文句』講義」全6回 対面&実況
開催日時：最終月曜日 午後6時30分~8時30分 講師：菅野 博史
第1回 2023年10月23日 / 第2回 11月27日 / 第3回 12月18日
第4回 2024年 1月29日 / 第5回 2月26日 / 第6回 3月25日
【受講料】12,000円(全6回の講義分)

【会場】新宿常円寺 祖師堂地階ホール 新宿区西新宿7-12-5 電話03-3371-1797(寺務所)

【申込】受講講座名・氏名・住所・連絡先を明記して送付 ⇒ FAX:042-627-7227

mail:hokkecommons@gmail.com / ブログ:<https://hokke-commons.jp/>

192-0051 八王子市元本郷町1-1-9 善龍寺内 **法華コモンズ仏教学林 事務局**

賛助会員一覧（敬称略）

※令和五年度分として

個人会員 ※1口 一万円

6口	小松 正学	2口	間宮 啓壬
6口	松原 勝英	1口	株橋 祐史
6口	中野 顕昭	1口	長谷川正浩
4口	鈴木 正厳	1口	互井 観章
3口	西山 英仁	1口	澁澤 光紀
3口	持田 貫信	1口	鍋島 真永
3口	竹内 敬雅	1口	匿名 希望

法人会員 ※1口 五万円

4口	立行寺	2口	本妙寺
2口	東洋哲学研究所	2口	善龍寺
2口	持法寺	2口	大久寺
2口	本國寺	1口	天龍寺

(以上)

特別支援団体

本多日生記念財団 36万円

※本多日生記念財団様からは、本学林の前身となる本化ネットワーク研究会の時代から、毎年継続して多額のご支援を頂いております。

◎ぜひぜひのご賛助にご支援に篤く感謝申し上げます。

年間賛助会員加入のお願い

法華コモンズ仏教学林では、本学林の趣旨に賛同して運営の維持に協力して頂ける「年間会員」を新学期時に募集しています。下記の要領にて、受付しておりますのでぜひご協力のほどお願いいたします。

【年間賛助会員 加入申込み】

- 個人会員 1年間1口(1万円)
- 法人・団体会員 1年間1口(5万円)

《お申込み年度の特典》として

- 個人会員で6口以上の方には、会員のみ使える年間フリーパス受講証を差し上げます
- 法人・団体会員では2口で、誰でも使える年間フリーパス受講証を差し上げます

※「年間フリーパス受講証」は、開設の全ての講座を一年間にわたり受講することができます。

- お申込み頂ける方は、右の内容を書いて、表紙タイトルまたは7頁下にあるメールアドレス、ファックス、ブログからお申し込み下さい。

- ★ 個人か法人か、また何口かを明記する。
- ★ 名前、年齢、住所、電話、ファックスまたはメールアドレスを明記する。

- 直接にご加入・ご支援を頂ける方は、郵便振込用紙にて通信欄に口数をご明記の上、同封の振込用紙が、下記の口座にてお振込み下さい。

【口座名】 法華コモンズ仏教学林

【口座番号】 0015007-634712

「講座映像版」販売のお知らせ

- 菊地大樹先生「吾妻鏡」と鎌倉仏教」6回
- 池上要靖先生「初期仏教研究」6回
- 菊地大樹先生「歴史から考える日本仏教」

- ① 鎌倉時代を射程にいれて ② 《顕密問題》を考える
- ③ 日本宗教史の名著を読む ④ 鎌倉仏教史の名著を読む

※①～④まで各講座それぞれ6回の講義

◎ダウンロード版：価格一万二千元（消費税込）

全6回講義の動画ファイルとレジユメPDF
◎DVD版：価格一万二千五百円（消費税・送料込）

全6回講義のDVD6枚組とレジユメ印刷物

◆詳細はブログ(<https://hokke-commons.jp>)参照。

■【本化ネットワーク叢書】頒価一冊二千円+送料

○叢書(2) 『「九識説」とは何か』

○叢書(3) 『本門戒壇論の展開』

法華コモンズ通信 第十一号

- 発行日 二〇二三(令和五)年八月十六日
- 編集発行 法華コモンズ仏教学林
- 発行所 法華コモンズ仏教学林 事務局
一九二〇〇五一 東京都八王子市元本郷町二一九

【FAX】042(627)7227